エネルギー講演会 in 仙台　（東北エネルギー懇談会主催）

東北6県と新潟県のエネルギー事業者や企業、団体でつくる「東北エネルギー懇談会」は昨年12月7日、仙台市内のホテルで「エネルギー講演会in仙台」を開いた。スポーツジャーナリストで大阪芸術大教授の増田明美氏が「スポーツと地域とエネルギーと」と題して講演。東京五輪や女子駅伝の舞台裏から、エネルギーのベストミックスまで、笑いを交えて分かりやすく解説した。同会の会員ら約100人は、検温や手指消毒などの感染症対策を講じて出席し、熱心に聞き入っていた。

同講演会は、電力などのエネルギーを巡る話題や、タイムリーな時事問題などを解説する識者が講師を務め、随時開催している。

スポーツの話題からエネルギーのことまで、さまざまな話題が語られた「エネルギー講演会in仙台」

スポーツジャーナリスト 大阪芸術大教授　増田　明美 氏

人生の長距離走は知好楽で

聖地・宮城で地元選手活躍

ますだ・あけみ　1964年千葉県いすみ市生まれ。成田高在学中、長距離種目で次々に日本記録を樹立する。84年ロサンゼルス五輪女子マラソン日本代表。92年に引退するまでの13年間に日本最高記録12回、世界最高記録2回更新の記録を残す。引退後は執筆活動やマラソン中継の解説などに携わるとともに、日本パラ陸上競技連盟会長、全国高校体育連盟理事、日本パラスポーツ協会理事などを務め、陸上競技の発展に貢献している。

仙台は、仙台国際ハーフマラソンやクイーンズ駅伝（全日本実業団対抗女子駅伝）の解説などで度々訪れています。滞在中は広瀬川河川敷や仙台城跡、東北大キャンパス内を通る「三太郎の小径（こみち）」などを走っています。

宮城県は近年、女子の長距離走の「聖地」になっていると感じます。クイーンズ駅伝のほか、全日本大学女子駅伝も行われていますし、仙台育英学園高は男女とも全国高校駅伝の強豪校として知られています。

（昨年）11月のクイーンズ駅伝は積水化学が初優勝しました。3区を走ったのは大崎市出身で常盤木学園高（仙台市）を卒業した佐藤早也伽さん。区間2位の力走で首位を奪う活躍ぶりに、高校時代の恩師も涙ぐんでいました。

また積水化学アンカーの木村梨七さんも、仙台市出身で仙台育英学園高を卒業した地元選手です。首位で受けたたすきをしっかりとつなぎ、笑顔で優勝のゴールテープを切りました。

選手が次々とゴールするころ、ふと空を見上げると、大きな虹がかかっていました。選手の頑張りをたたえているようで、最高の演出でした。今は「練習は厳しいけれども雰囲気は明るくする」ことを心掛けているそう。いいムードづくりが好結果をもたらすのは、家庭や職場、学校にも共通する大事なことだと思います。

失ったものは数えない

（昨年）夏には東京五輪・パラリンピックも開催されました。印象に残った競技の一つは、今五輪から加わったスケートボードです。若い選手が活躍して盛り上がりましたね。

スポーツの語源はラテン語の「デポルターレ」で、意味は「たわむれる、楽しむ」です。しかし日本は「スポーツ＝体育」のイメージが強く、「罰として○周走れ」などと懲罰的に使われることもあります。和気あいあいとしたスケートボード選手の姿を見て、デポルターレの言葉と意味を思い返しました。

国際五輪・パラリンピック委員会が、新たに競技を加える際に大事な条件は三つあるそうです。若者に支持されること、都市型であること、男女平等であることです。東京五輪で採用されたサーフィンやスポーツクライミングなどがそうです。既存競技でも男女混合種目が増えました。

東京パラリンピックは、多くの競技がテレビ中継されて良かったです。卓球に出場した選手は両腕がありませんでしたが、口にラケットをくわえて足でボールをトスしていました。人並み以上の努力をしてハンディを克服する姿に、元気と勇気をもらいました。

「パラリンピックの父」といわれるドイツ出身の医師グットマン博士は「失ったものを数えるな。今あるものを最大限生かそう」という言葉を残しました。多くのパラ選手が座右の銘としています。私も間もなく60歳。失ったものを数えると、めそめそしてしまいます。親から与えられた能力を最大限に生かして天寿を全うしようと、そういうふうに考えています。

五輪失敗も貴重な経験

私は20歳の時に出場したロサンゼルス五輪女子マラソンで失敗しました。事前合宿での暑さ対策に失敗して調子が上がらず、壮行会をすっぽかしてしまいました。本番では次第に先頭集団から離され、「日本中が自分のぶざまな姿を見ている」と思うとみじめに感じ、結局16キロ付近で途中棄権。私にとって最初で最後の五輪でした。

帰国後、見知らぬ人から「非国民」と非難され、人の目が怖くて3カ月間部屋に閉じこもっていました。そんな時、全国の方からたくさんの手紙をいただき、1通1通読むごとに励まされ、元気を取り戻すことができました。心を傷つける言葉を発するのは人だけど、励ましてくれるのも人なんだと、人の優しさが染みた時間でした。

五輪出場の後、何年かして「知好楽（ちこうらく）」という言葉に出合いました。「ものごとをよく知っていることは素晴らしいが、知っているだけの人より好きな人の方がまさっている。さらに、好きな人より楽しんでいる人の方がまさっている」という意味の論語の一節です。

振り返ればロサンゼルス五輪の時は、マラソンの知識はあったものの、「好き」や「楽しい」といった気持ちはありませんでした。今はこの言葉を座右の銘として、しっかり準備した上で、緊張しすぎないように頑張ろうという気持ちになりました。

自分の五輪マラソンは大失敗しましたが、得たものは多く、人生の長距離ランナーとしては経験して良かったと思っています。

電源構成 駅伝のように

私がエネルギーや環境について勉強を始めたのは、作家の神津カンナさんとの出会いがきっかけでした。神津さんは、生活者の視点からエネルギーについて考える「ETT」（フォーラム・エネルギーを考える）の代表を務めていて、勉強会などに参加するようになりました。

宮城県とエネルギーとの関わりで思い出すのは、震災後の2014年、健康づくりを通して被災地を支援しようと女川町などで行ったウオーキングとランニングのイベントです。

女川では町民や東北電力の方々と歩き、震災時の話も聞きました。震災直後、町民が避難先として向かった一つが女川原子力発電所で、6月ごろまで360人ほどが生活していました。東北電力や関連企業のみなさんは、自分たちの食事を減らして避難した方と分け合ったという話も聞いて感動しました。

私は発展途上国で女の子を支援する活動も続けています。ラオスの山岳地帯には電気が通っておらず、発電機で明かりをつけて、広場に住民を集めて衛生教育をしたこともありました。「電気のない土地では情報が届かず、部族の長老らが支配し、民主主義が育たない」といわれるほど、電気と民主主義には深い関係性があります。

スポーツジャーナリストとして取材する中で、電気エネルギーは「駅伝」のように考えればいいのではないかと思っています。駅伝はエース級から新人選手までワンチームで走ります。電気エネルギーも火力、水力、原子力、再生可能エネルギーなどそれぞれ一長一短がありますので、「ここは原子力」「つなぎは火力」など、たすきをつなぐようにベストミックスの電源構成でやっていくのがいいのではないでしょうか。

企画・制作／河北新報社事業局